

「創造の回復」シリーズ 1

終末の今を生きる

- 千年王国説の違いを超えて -

改定版

島先克臣

目次

I	千年王国説の違いを超えて	1
A	千年王国説と終末論	1
B	終末に関する三つの立場	1
C	包括的終末論	2
D	まとめ	5
II	聖書全体とどのように関わっているのか？（創造秩序の回復）	5
A	創造	6
B	墮落	6
C	回復の御計画	6
D	回復と完成（預言）	8
E	新約聖書（預言の成就）	8
F	まとめ	8
G	Q & A	9
III	終末の今に生きる	11
A	新プラトン主義的靈性	11
B	聖書的靈性を目指して	13
C	キリストによる回復	14
D	キリストによる完成	14
E	最後に	15

初めに

世界の終わりについて語る終末論は、今も昔も、多くの人々の関心と興味を惹いてきました。また、死後どこへ行くのかという問いも実に大きなもので、終末論と関わっています。この小冊子は、今まであまり知られていなかった「包括的終末論」という福音派の一つの立場を紹介し、その意義を皆さんに考えていただきたいという願いをもって書かれています。また2004年にいのちのこたばら社から出版されたポール・マーシャル著の『わが故郷、天にあらず』を神学的にサポートするという目的もあります。

I 千年王国説の違いを超えて

A 千年王国説と終末論

終末論という言葉を書く時、私たちは普通、千年王国と再臨の時期に関する諸説を思い浮かべます。実際、福音的諸教会は、千年期前再臨説、千年期後再臨説、無千年王国説、等の諸説に別れています。¹確かに千年王国は大切なのですが、その時期は永遠に続くのではないことを改めて心に留め、一時的な千年王国に焦点を当てるのではなく、千

¹ 1. 千年期前再臨説（前説）
キリストが地上に目に見える形で再び来られ、信者が復活し、そして主が地上で千年の間王として治められる。その後、未信者が復活し、最後の審判があり、最後に新天新地が現れる。これは、多くのアメリカの教派が取っている立場です。

[再臨・復活>千年王国>最後の審判>新天新地]

2. 千年期後再臨説（後説）

聖霊の力により教会の世界宣教が成功し、その結果、世界が変わっていき、目には見えないがキリストが教会を通して愛と正義によって千年間地上を支配するようになる。その後、キリストが再臨し、全ての死者が復活し、最後の審判があり、そして新天新地が現れる。

[千年王国>再臨・復活>最後の審判>新天新地]

3. 無千年期説（無説）

千年とはキリストの初臨と再臨の間のキリストの主権を指す象徴的数字である。世の終わりに、キリストが再臨し、全ての死者が復活し、最後の審判があり、次に新天新地が現れる。キリストは、新しい地上で、愛と正義をもって、世界を支配される。これはヨーロッパの福音派の間によく見られる立場です。

[（千年王国）>再臨・復活>最後の審判>新天新地]

年王国の後の、最終的で永遠に続く新天新地にこそ思いを向けるべきなのではないかと思います。

千年王国説の違いに焦点を当てるべきではないと語る、指導的な福音派の学者は少なくありません。例えば、ジョージ・E・ラッドは千年王国説の論争に関してこう言います。

これらの解釈のどちらも、究極的到達点（来るべき世における神の国の完成）において同じであることが、しばしば見過ごしにされている。²

F.F.ブルースもまた、千年王国説の違いは「比較的小さい問題」で、

福音の本質にかかわるものは、一定の時に対する確実な期待である。それは、キリストの救贖行為の宇宙的効力が完全に発揮されて「被造世界自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられる」（ロマ8:21）時への確実な期待なのである。³

と語ります。福音派の代表的な終末論の専門家であるリチャード・ボーカムも

千年王国は、厳密には、歴史の終わりと万物の新しい創造との間に挟まれた一時的な地上の完成である。⁴

と述べています。ラッド、ブルース、ボーカムの三者は、一時的な千年王国に関わる諸説の違いを超えて、いつまでも続く最後の状態に目を向けるよう私たちに勧めているのです。この小冊子でも終末論と言う時、千年王国説や再臨の時期を指さずに、その後の永遠の状態を指しています。

B 終末に関する三つの立場

ボーカムは、今までの歴史を振り返ると、大きく分けて三種類の終末論があったと述べています。それは「この世的」、「あの世的」、そして「包括的（ホーリスティック）」な終末論です。⁵

² 「神の国」、『神学事典』（東京：聖書図書刊行会、1972）。

³ 『神学事典』（東京：聖書図書刊行会、1972）、p. 201-2。

⁴ Richard Bauckham, "Eschatology," in *The Oxford Companion to Christian Thought*, ed. Adrian Hastings (Oxford: Open University Press, 2000).

⁵ Bauckham, "Eschatology."

1 「この世的」終末論

アウグスティヌスは、当時一般的だった「この世的」終末論に反論しました。当時のクリスチャンは、自分達の様々な欲望が、来るべき地上の御国で満たされると単純に考えていたのです。地上に理想郷を求めるのは、宗教ではありません。

19世紀の現代主義は、人間の理性によって地上に理想郷を建設できると信じましたし、自由主義は理性と教会の影響によって、また、マルクス・レーニン主義は革命によって理想郷の建設を求めたのです。このような終末論は、神への信仰があるかどうかに関わらず、地上の理想郷が最大の関心であったという意味で「この世的終末論」と、ボーカムは名付けています。

2 「あの世的」終末論

第二番目は、「あの世的終末論」です。旧約聖書が書かれた時期と新約聖書が書かれた時期の間の中間時代に、ユダヤ教はヘレニズムの影響を強く受け、自分達の最終的な目的地は天国であると考えようになりました（この考え方は旧約聖書にはないものです）。新約聖書の後の時代の西方教会（後のカトリックとプロテスタント）も、ギリシャ思想、特に新プラトン主義の影響を強く受けていきます。この教えによれば、宇宙は霊によって放出されたものであって、目に見える世界は悪か、低級です。ですから彼等にとっての救いとは、霊魂が肉体と物質界から離れて天に昇り、神と一体となることでした。この影響を受けた西方教会は、人が地上で神と一つになるとは考えられなかったのです。⁶ボーカムも、終末論に対するプラトン主義の影響を次のように語っています。

世界の未来を犠牲にした形で、死後における個人の未来が強調されて来た。この強調は、（教会史の）初期においてはプラトン主義の影響、最近では現代主義的個人主義の影響による。⁷

「あの世的終末論」は、神との一体を求めるという点では正しかったのですが、神が造られた目に

見える世界という、キリスト教の救いにとって欠くことのできない面をないがしろにしてしまったのです。

3 「包括的」終末論

三番目の種類は、包括的（ホーリスティック）終末論です。ここでボーカムは、霊だけでなく身体も、個人だけでなく共同体も、人間だけでなくそれ以外の被造世界も包括するような終末論を意味しています。黙示録に描かれている新しいエルサレムは、「この世的終末論」と「あの世的終末論」の二極化を乗り越えるものだと、ボーカムは語り、この終末論こそ聖書的なものとしています。つまり、新しいエルサレムが天から下って来る時、信者は神と一つとなるのですが、それは天国でなく、地上でなされることになります。しかも、それは、個人としてだけではなく、共同体として一体となるのであり、また、人間だけでなく、全被造世界のために一つとなるのです。

C 包括的終末論

人が、天国ではなく地上で神と一つとなること、また、それが完成した状態であるというのは、ボーカムだけが主張している事ではありません。

1 古代教会

その考えは、新約聖書時代の直後の古代教会の中にもみられます。

a 十二使徒の教え

使徒時代の直後、西暦百年前後にシリア地方で受洗入会用のテキストとして使われていたと言われる「十二使徒の教え」⁸によると、当時のクリスチャンが待ち望んでいたのは、死んで天へ行くことではなく、死者の復活（16:6）と主の再臨です。この書は次の言葉で閉じられています。「その時、世は主が天の雲の上に乗って来られるのを見る」（16:8）。

b エイレナイオス

初代教父エイレナイオス（約140-200AD）も「使

⁶ 拙著、創造の回復シリーズ No.2『「神国論」に見る新プラトン主義的霊性』参照。

⁷ Bauckham, "Eschatology."

⁸ 上智大学中世思想研究所編、『初期ギリシャ教父』、中世思想原典集成、vol. 1（東京：平凡社、1995）、p. 23-46。

徒達の使信の説明」⁹の中で、「復活に備え、身体を汚れないものとして保て」（41章）と勧告しています。¹⁰彼はキリスト教の救いを罪と死に対する肉体における勝利であり、最後にはキリストが「天と地にある一切のものを自らのうちに再統合する」ことなのだとして理解しています（30-39章）。この「再統合」（recapitulatio）とは「創造の回復と完成」を意味する、とエイレナイオスの研究者グスターフ・アウレンは述べています。¹¹つまりエイレナイオスにとって、キリスト教の救いがもたらすものは、「肉体と全世界が消滅して靈魂だけが天国に行くこと」ではなく、肉体と他の目に見える世界全てが、神の望む姿に回復し、完成することでした。それは、十字架の上で始まり、再臨によって完成するのです。

c 古ローマ信条

西暦200年には既に使われていたという洗礼式文では、受洗者は、死後天へ行くことを信じるか、とは問われず、次のように聞かれました「あなたはキリスト・イエスが、．．．生ける者と死ねる者を審くために来ることを信じるか？あなたは、．．．身体によみがえりを信じるか？」¹²

d ニケア信条

8世紀以降の西方教会だけで使われてきた使徒信条に比べて、より古く、東西の全教会が一致して告白したニケア・コンスタンチノーブル信条（西暦381年）¹³でも、同じように天上の世界には触れ

ず、主は「栄光のうちに再び来て、生きている人と死んだ人とをさばかれます。その支配は終わることがありません。．．．私は、．．．死人の復活と来たるべき世のいのちを待ち望みます。」¹⁴と告白しています。

e まとめ

1世紀から4世紀の全ての正統的教会が待ち望んでいた救いの完成とは、クリスチャンの魂が天に昇ることではなく、主が再び地上に来られて永遠に治めて下さること、そして、私達がそこに肉体をもってよみがえることでした。

2 東方教会

ギリシャ思想の影響を西方教会（カトリック、プロテスタント）程には受けなかったという東方教会¹⁵では、古代教会の教えを保っています。ギリシャ正教の指導的神学者であるジャン・メイエンドルフは次のように述べています。

キリストの再臨は世における、神の可視的勝利であり、また全被造世界の最終的変貌をもたらすものである。教会は、この再臨を待ち望んでいる。その時、被造世界の中心であり主である人類は、罪と死によって歪んでしまいう以前の本来の像に回復されるのである。この回復は肉体の復活を意味する。なぜなら人間は、霊だけでなく霊肉一体の存在であり、肉体なしには必然的に不完全だからである。¹⁶

東方教会にとっての救いは、被造世界が消えて霊

⁹ 上智大学中世思想研究所編、『初期ギリシャ教父』

¹⁰ Irenaeus, *Proof of the Apostolic Preaching*, trans. Joseph P. Smith, *Ancient Christian Writers*, ed. Johannes Quasten (London: Longmans, 1952), p. 74.

¹¹ グスターフ・アウレン著『勝利者キリスト』（東京：教分館、1982）、28。

¹² John H. Leith, "Creeds," in *The Anchor Bible Dictionary*, ed. David Noel Freedman (New York: Doubleday, 1992).

¹³ 使徒信条の先駆けとなる古ローマ信条は、二世紀から三世紀末には質問形式で西方で使われていましたが（例：Hyppolytus）、使徒信条が現在の形で現れるのは710-20AD頃で、しかも、使徒信条は西方教会でのみ使われて来ました。それに比べ、ニケア信条は東西の全教会が受け入れた最初の信条です。ニケア信条の「その支配は終わることがありません」は、御子の支配の一時性を説くマルケレスの異端に対応するため加えられました。「黄泉に下り」は、古ローマ信条やニケア信条

ではなく、アタナシオス信条（420-450AD）と使徒信条に加えられています。前掲 John H. Leith, "Creeds". ヘンリー・ベッテンソン編、『キリスト教文書資料集』（東京：聖書図書刊行会、1962）、54-55。キリスト教古典叢書刊行委員会編、『信条集 前編』（東京：新教出版社、1955）、360。

¹⁴ ルーテル教会礼拝式文。

¹⁵ 正教（東方教会）の視点では次のようになります。ローマ教区（ローマ・カトリック）は、他の教区の交わりから次第に分離し、またギリシャ二元論の影響を受けて行った。そこから派生したプロテスタントは、カトリックの二元論に対抗しつつも結局世俗化してしまつた。正教こそが初代教会の教理と伝統を守っている。高橋保行著『ギリシャ正教』、講談社学術文庫（東京：講談社、1980）。

¹⁶ John Meyendorff, *Byzantine Theology: Historical Trends & Doctrinal Themes* (New York: Fordham University Press, 1974), 219.

魂が天に行くことではありません。肉体を含む全被造世界の回復こそが、キリストによる救いが最終的にもたらすものと捉えているのです。

3 現代の福音主義神学

古代教会と東方教会だけではありません。現代の福音派の中にも、「包括的終末論」を支持している学者がいます。

例えばバプテスト系の組織神学者で、強力な前千年王国再臨主義者のヘンリー・シーセン博士は、その古典とも言える『組織神学』¹⁷の本の中で、天と地は消滅しない、変えられるのだと語り、¹⁸新しい地を可視的、物質的なものと確信していて、「物質が永久に存在するというのは、何故、不思議に思わなければならないのであろうか」(p. 838)と述べます。

ルター派の神学者 H. ジェーコブズは、「それゆえ、最後のさばきの後の、祝福された者達の故郷は新天新地である。特に『新しい地』である。」¹⁹と述べ、新しい地を「現実の世界」(p. 621)としています。

J.I. パッカーが推賞するゴードン・スパイクマンという改革派の組織神学の本も、新しい地は、今の地と根本的には断絶していない、と次のように語ります。

主の現れは、それ故、過去との根本的な断絶を意味していない。．．．神が新たにされる世界では、全てが全くあがなわれ、その定められた目的に向かって完全に整えられている。その世界によみがえった人間の生き方を形作るのは、私達にとってはなじみ深い、神が与

えられた構造や機能を伴う創造の秩序なのだ。剣を鋤に打ち直すというイザヤの預言(60、65章)は新しい地においてついに成就する。

では、20世紀後半に生きる私達クリスチャンはどうだろう。私達は時々、ヨハネが描いた絵を、「あの世」的な言葉(「青い地平線の向こう」)で、遠く離れた所(「どこかの美しい島」)として、異様な名前(「ベウラの地」)を使って書き直してしまうので、現実のものとして捉えられないばかりか、行きたいとさえ思えない。ホークマンはこのような空気のような描写に対し、辛辣な疑問を投げかける。

そのような概念は聖書的な終末論を正當に扱っているといえるだろうか。我々は宇宙のどこかで、白い衣を着てハーブを奏で歌いつつ、雲から雲へとひらひら飛び回るのだろうか。聖書はそれとは正反対に、神が新しい地を創造し、我々はその地上で栄化された復活の体をいただき、神に栄光を帰しつつ生きるという事を確約している。それ故、我々は、新しい地上でその美しさを楽しみ、資源を探求し、神の栄光のためにその宝庫を使いながら永遠を過ごすことを望むのである。(「聖書と将来」p. 274)²⁰

H. バビンクというオランダ改革派の組織神学者も非連続における連続という、同じ点を強調して次のように述べます。

我々は、全く新しい創造という意味で捉えてはならない。確かに現在の天と地は現在の形では終わりが来(I コリント 7:31)、ちょうど太古の地球が洪水によって水浸しになったように、火によって焼かれ清められる。しかし、ちょうど人間がキリストによって新たにされるがそのために滅ぼされることがないように(II コリント 5:17、新天新地と呼ばざるを得ないような相当の変化を通るのであるが、基本的に世界は保たれるのだ。世界全体もまた、その大いなる再生の日に向かって進んでいる

¹⁷ 島田福安訳(東京: 聖書図書刊行会, 1961)。

¹⁸ シーセンは次のように語っています。

これらは、「新しい」とよばれているが、絶対的な意味で新しいというのではない。なぜなら、「地は永遠に変わらない」からである(伝道 1:4、詩編 104:5、119:90 参照)。(p. 837)

またシーセンは新しいエルサレムについては、それを「実在の都」(p. 839)とした上で、「これがアブラハムの待ち望んだ都であろう(ヘブル 11:10、15、16 節参照)。これは、今日、信者達が求めている都である(ヘブル 13:14)。」と書いています(p. 839)。

¹⁹ H. ジェーコブズ、『キリスト教教義学』, 鍋谷堯爾訳(東京: 聖文舎, 1970), 619。

²⁰ Gordon J. Spykman, *Reformational Theology: A New Paradigm for Doing Dogmatics* (Grand Rapids: Eerdmans, 1992), 559-560.

のである(マタイ 19:28)。²¹

上記のような、バプテスト、ルター派、改革派の組織神学者だけではなく、同じ意見をもつ聖書学者も少なくありません。上記の N.T.ライトも、

黙示録 2 1 章によれば、未来に起こる事は、人々が天に逃げるのではなく、新しいエルサレムが天から降りてくるのであり、神のみ住まいが我々人間と共にあるようになる、という事なのだ。²²

と語ります。やはり新約学者のジョージ・E・ラッドも次のように語っています。

最終的な回復には、物質界も含まれる。... 預言者は絶えず、贖われた(目に見える)世界で、神の王国が確立されることを語ってきた(イザヤ 11:6-9, 65:17-25)。そして新約聖書も同じ神学を共有している。被造世界は、そこから逃れるべき悪いものとは、決して見なされていないのである。²³

D まとめ

以上の事をまとめてみましょう。初めに私たちは、終末論に三つの立場があることを見ました。「この世的」終末論は、何よりも理想的な社会を地上に建設しようとしてきました。「あの世的」終末論は、ギリシャ哲学の影響を強く受けたもので、被造世界を無視した形で、天国で神と一つになることを求めています。聖書的で「包括的な」終末論では、この二つを統合しています。つまり、神は現在、被造世界を回復しようとされ、最後には地上に連れて世界を完成し、御自身の民と地上で共にいて下さるのです。

そして、古代教会、諸信条、東方教会、そして、前千年王国再臨主義者、バプテスト、ルター派、改革派を含む現代の福音派のある学者たちは、包括的終末論の立場に立っているのを見てきました。

²¹ H.バヴィンク、『信徒のための改革派組織神学(下)』、松田一男訳(広島県竹原市: 聖恵授産所, 1985), 603-04.

²² N. T. Wright, *New Heavens, New Earth: The Biblical Picture of Christian Hope*, Grove Series, no. B 11 (Cambridge: Grove Books, 1999), 11.

²³ George E. Ladd, "Eschatology," in *The International Standard Bible Encyclopedia* (Grand Rapids: Eerdmans, 1982).

創造主が約束されたキリスト・イエスによる救いは、異教思想のような「被造世界の消滅と非物質世界への逃避」ではありません。ニケア信条を基盤にしている全てのクリスチャンが信じ、待ち望んでいるのは、主イエス・キリストが目に見える形で地上に来られ、生ける者と死ぬる者をさばき、全世界を王として永遠に治められることです。その時、私達は朽ちない肉体をもってよみがえり、他の被造世界も変えられ、全被造世界が完成するのです。パウロがはっきりと全被造世界が和解の対象と述べている通りです。

その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させて下さったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させて下さったのです。(コロサイ 1 : 2 0)

II 聖書全体とどのように関わっているのか? (創造秩序の回復)

今まで私たちは、この時代の終わりに焦点を当てる終末論を学んできました。次に考えたいのは、なぜ包括的終末論なのか、また、包括的終末論と他のキリスト教教理とはどのような関係にあるのか、という疑問です。言い換えますと、何故、神は、私達の霊だけでなく肉体も、人間だけでなく全被造世界をも和解の対象にし、最後には全てを新たにして完成させて下さるのか、という問いです。どうしてキリスト教の救いは、ギリシャ哲学や仏教と違い、被造世界から逃げないのでしょうか。非物質の天上の世界に魂だけ行けば良いのではないのでしょうか? その疑問に対する答えは簡単です。神が人と世界を造られたのは、それを捨てるためではなかったからです。つまり、キリスト教の救いは、罪によって損なわれた神の元々の御計画、全被造世界に対する御計画を回復するからなのです。旧約学者ジョン・ゴールディングイはこの点を次のように述べています。

贖いの目的は、創造の回復である。人類が贖われたのは、み前で創造本来の生き方、今でも神が全ての被造物に望んでいる生き方をするためである。(p. 229) ...その意味でイザ

ヤ書が最終的に望み見ているのは、創造の秩序の回復であり、人類の歴史の復興なのだ。

(p. 238)²⁴

新約学者の上述のラッドも次のように説明しています。

神の贖いのみ業のご目的は、悪と罪によって乱れた宇宙に秩序を回復することだ。そこには、人間の世界と霊の世界（エペソ 1:10）、そして以下で学ぶように自然界さえ含まれる。神は最後にはキリストを通して万物と和解される（コロサイ 1:20）。本来万物はキリストを通し、キリストのために創造された（16節）。最後にキリストはすべてのことにおいて、第一のものとなられる（18節）。軋轢と混乱によって引き裂かれきた宇宙が、その創造主との平和に回復させられるのだ。²⁵

「救いの目的は創造本来の在り方の回復だ」という視点は、ウィリアム・J・ダンブレレル²⁶、クリストファー・J・H・ライト²⁷、そしてアル・ウォルターズ²⁸等の旧約学者が強く支持していますし、新約学者では、上述のリチャード・ボーカム、ジョージ・ラッドやN.T.ライトが同じ視点を共有しています。

そこで、このような聖書学者達の聖書理解、つまり「創造秩序の回復」という視点を簡単にまとめてみましょう。

A 創造

創造主は、太陽、空気、水、動植物等を造りました。また、それらが有機的に営まれているあり方、

システム、秩序も造りました。その被造世界の中心は人間でした。その人間は、最初から霊肉一体のものとして造られています。²⁹神はその全てを見て、「非常に良い」とされました（創世記 1:31）。このスタートの時点で既に、目に見えるもの全て、また人間の肉体を悪か低級と見る新プラトン主義の思想と大きな違いが見られます。

創世記 1:28 で、神はアダムとエバに「生めよ、増えよ、地を満たせ、地を従えよ」とおっしゃいました。その意味は、「神を愛し、愛と正義に満ち、他の被造世界を愛情深く正しく創造的に治める共同体で地上を満たせ」というものです。地上で人間と共にいて下さる神（2:15, 19, 3:8）が中心で、神・人・自然との愛の関係に生きる人間、そしてその周りの被造世界というのが、創造本来の「非常によかった」あり方、創造の秩序なのです。

また人間は「神の像」に造られているとありますが、古代中近東で「神の像」という言葉は、目に見えない神の代わりに、目に見える代理人としてこの地上を治める王様を指しました。聖書は、この特別な言葉を、全人類を指すものとして使っているのです。すなわち、目に見えない神と共に、その神の目に見える代理人として、愛と正義をもって、かつ創造的にこの地上を治める存在、それが人間であり、そのように治める為に、人間は神に似せて造られたのです。知性も、愛も、正義を愛する心も、芸術性も、手も足も舌も、地を治めるために与えられたのです。

B 墮落

ところが、アダムとエバは、その命令に背を向け、人間性は歪み、神の代理人としての治める勤めも歪んでしまいました。その結果、地上は偶像礼拝（神との関係）、搾取と戦争（人との関係）、そして環境破壊（地との関係）で満ちています。今の状態は、神が期待した創造本来の秩序にそったものではありません。人間の罪の結果なのです。

C 回復の御計画

²⁹ 神がすでに人間であったアダムの鼻から吹き込まれたものは、靈魂ではなく、生命です。

²⁴ *Theological Diversity and the Authority of the Old Testament* (Exeter: Paternoster Press, 1987).

²⁵ Ladd, "Eschatology."

²⁶ *Covenant and Creation: A Theology of the Old Testament Covenants*, Biblical and Theological Classics Library (Exeter, Devon UK: Paternoster Press, 1984).

²⁷ *God's People in God's Land: Family, Land and Property in the Old Testament*, Biblical and Theological Classics Library (Carlisle, UK: Paternoster Press, 1997 (90)).

²⁸ *Creation Regained: Biblical Basics for a Reformational Worldview*, Biblical Classics Library (Carlisle, UK: Paternoster Press, 1996). 邦訳、A.M. ウォルターズ著『キリスト者の世界観：創造の回復』、宮崎弥男訳（広島県竹原市：聖恵授産所、1989）。

1 ノア

地上に悪が増大したのを見た神は、地上の世界を水で一掃されますが、創造の時の計画を放棄したのではありません。正しいノアを選び、他の動物と共に新しい地に置き、もう水で滅ぼさないと約束し、「地を治めよ」という創世記 1:28 の命令を繰り返されます (8:17,9:1-3)。また神は人とだけでなく、全ての生き物、そして全地とも契約を結ばれます (9:9, 13)。アダムとその子孫に出来なかった「神を愛し、愛と正義に満ち、他の被造世界を愛情深く正しく創造的に治める共同体で地上を満たす」という神の被造世界に対する計画を、ノアとその子孫に託すのです。ノアの出来事は、魂が天に行くことの例話にはなりません。神が被造世界を保ち、その秩序を回復するという、被造世界に対する愛とコミットメントの現れなのです。しかしながら、ノアとその子孫も、神の期待にそえませんでした (1 1 章)。

2 アブラハム

そこで、神はアブラムを選び、カナンという地で (自然界) 本来の人間の共同体を作る (共同体)、しかも、そのことが全世界の祝福につながる (全被造世界)、という約束をします (12:1-3)。神は、創造の時の御計画をあきらめなかったのです。

3 カナンの地：第二のエデン

神はこの三重の約束の一部を、モーセを通して成就されます。

a 出エジプト

エジプトからの解放は、霊魂だけの救いではありませんでした。もしそうなら、エジプトから直接イスラエル人の魂を天に導かれたことでしょう。神の御計画は、イスラエル人が土地に住み、創造本来の御計画に沿って生活することだったのです。

b 律法

ですから、旧約の律法を読みますと、神を愛し、愛と正義に満ち、創造的に地を治めていくような共同体の姿が見えてきます。律法の目的は、特定の場所と時間において神の創造本来の秩序に従う共同体を回復しようとするもの、と言えるでしょう。それは、申命記を見ると良く分かります。

主は、愛の神であり、抑圧された弱い者にとつての正義の神です (10:17-19)。ですから、神はイスラエル人に貧しい人を守るよう命じました。³⁰また神は生活のあらゆる分野で愛と正義に生きるよう命じました。それには、司法 (16:18-20)、ビジネス (25:13-16)、奴隷の扱い方 (奴隷女も含む。21:14)、性関係 (22:13-19, 23-30) も含まれました。また家を新築した時に、屋上にフェンスを作って事故にあわないような対策を命じることまでされたのです (22:8)。

神は、他の被造物への愛も求められました。十戒には、6 日間家畜を働かせたら、一日休ませよとあり、他の箇所には 6 年間土地を使ったら 1 年休ませよ、と命じています (出エジプト 20:10, 23:10-12)。樹木の不必要な伐採までも禁じています (申命記 20:19)。

カナンの地は、ちょうどエデンのように (創世記 2:6, 10)、「天の雨で潤い」 (申命記 11:11)、そこで神の民は穀物と新しいぶどう酒、そして油を豊かに収穫するはずでした。エデンの園でのように (創世記 1:29, 30)、人々は食べて満足し (申命記 11:14,15)、エデンの園でのように労働は喜びに満ちたもの (申命記 12:7, 12, 28) になるはずでした。これらは、のろわれた状態 (創世記 3:17-19) から被造世界を回復するところの祝福でした。

ここで「神が、地上で共同体のまん中におられる」というエデンの園のモチーフが見られます。カナンの地は第二のエデンと言えると思います。しかも神は、他の民らが、イスラエルに注がれているこの祝福を見て、神に立ち返ることも期待していました (申命記 4:6-8, 26:18-19)。世界への祝福を神は望んでおられたのです。

c 王国時代

ソロモンやダビデのような王様がイスラエルを治めていった時代も同じです。王の勤めは、民の心を神に向けて社会正義を追求することでした (I

³⁰ (1) 七年後に負債を免除する (15:4, 7)。(2) 七年後に奴隷を解放する (15:12)。(3) その日の内に給料を支払う (24:14-15)。(4) やもめのために、穂を落とす (24:19-22)。

歴代 18:14)。ソロモンはかつて理想的な王で (II 歴代 9:8)、正義を行うための知恵を神に祈り求めました (詩篇 72、I 列王 3:9)。ダビデの子孫である王が永遠に治め (II サムエル 7:9-11)、ついに、愛と正義をもって全世界を治めるようになる、と神は約束しました (詩篇 72、110)。神の民を地上で確立し、全世界の祝福の基とするというアブラハムへの約束は、将来のダビデの子孫である王によって成就するのです。その時、全地は、神を恐れ、愛と正義に満ち、地を正しく治める共同体で満ちるのです。

d 捕囚

しかし、イスラエル人は、律法が与えられたのにも関わらず、神の民として生きることができませんでした。彼等は、偶像を拝し、王と人々は不正を行って自らを肥やしました (アモス書等)。家畜と土地を正しく取り扱わなかったことでしょう。ヨベルの年も守られなかったでしょう。彼等は、創造の秩序を回復しようとする律法の基準に達せなかったのです。預言者は悔い改めを呼び掛けましたが、彼等は生き方を変えようとしませんでした。その結果、バビロン捕囚という神のこらしめを受けたのです。

D 回復と完成 (預言)

旧約聖書の流れを見ると、人類の歴史は、御旨を地上で行うという点で、失敗の連続でした。アダムが失敗したため、神はノアに再出発のチャンスを与えて下さいました。ノアとその子孫も失敗したため、イスラエルに律法さえ与えて、カナンという土地で創造本来の共同体を回復しようとされました。しかし、彼等も失敗しました。では神は、御自身の民を通し、地上で創造の秩序を回復するという御計画を諦めてしまわれるのでしょうか？いいえ違います。神は油注がれた王 (メシア)、苦難のしもべ、を遣わし、カナンの地だけでなく、全地に神ご支配 (国) を広める、と預言者を通して約束するのです (イザヤ 9:6-7, 11:1-5, 42:1-4, 53:5-11)。このメシアによって、神の民は赦され回復されます (イザヤ 1、2 章)。私たちの身体も変えられ (イザヤ 35:5-6, 65:19-22)、他の被造

世界も新たにされます (イザヤ 11:6-9, 35:6, 41:18-29)。この新たにされた被造世界を、イザヤは新天新地と呼びました (65:17)。この王は、愛と正義をもって全地を治めて下さいます。そして全地は、神を恐れ (神との関係)、愛と正義に満ち (人との関係)、地を正しく治める (地との関係) 共同体で満ちるのです。被造世界に対する元々の神の御計画は、ついに完成し、永遠に続きます (イザヤ 66:22)。

E 新約聖書 (預言の成就)

1 回復の始まり

新約聖書は、預言されていたこのメシアがついに来た、と宣言します。キリスト (メシア) であるイエスが人として来て、十字架にかかり、復活して下さったことにより、主のご支配 (神の国³¹) がもたらされました。そのことにより、創造の秩序を回復する「終末が始まった」³²のです。そして今、イエスは、ご自身と一つになったクリスチャンを通して、ご聖霊によって、神の国 (創造秩序の回復) を広げておられます。私達は今、終末に生き、創造本来の人間と世界の在り方を目指しているのです。

2 回復の完成

そして、イエスがもう一度来られる時、神の国 (神の支配) が地上で完成し、永遠に続きます (黙示録 2 1、2 2 章)。

F まとめ

創世記から黙示録まで貫いているのは、被造世界への神の愛と被造世界へのご計画の遂行です。本来の世界は、大変良いものでしたが、私達の罪の故に、創造のあり方が歪んでしまいました。では「神の創造の目的は達せられなかったのか。決してそんな事はない。神は人間の意志や行為でご自身の目的を放棄したり、変更されるような方ではない。．．．神は、罪とその結果を贖い救うこと

³¹ ジョージ E. ラッド著『神の国の福音』(東京: 聖書図書刊行会, 1965); ハワード・A・スナイダー著『神の国を生きよ』後藤俊夫、小淵春夫訳 (東京: あめんどう, 1992)参照。

³² Ladd, "Eschatology."

によって、天地創造の目的を達したもうのである。」³³

G Q & A

ではここで、次のテーマに移る前に、よく質問される幾つかの問いに対して、不十分とは思いますができる範囲で答えていきます。

1 死後はどこへ？

人が死んでから復活するまでの間を、神学用語で「中間状態」と呼びます。聖書は当時の諸宗教と違い、中間状態についてはっきりと教えていません。ジェームス・D・テイバーは、古代中近東では「人が天に昇るという考えは、突飛なだけではなく、神聖な世界への侵入だととらえられたことだろう」と言い、旧約聖書でも、

アブラハム、モーセ、ダビデといった偉大な英雄であろうと、人の普通の運命は、死であり、黄泉（地下の世界）で休む事であった（創世25・7—9、申命34・6、I列王2・10、なお使徒2・29—34参照）。³⁴

と語っています。ところが、パウロ書簡の中には、「魂が肉体から離れ、天国で神と共にいる」というヘレニズムの考えを取り入れたように見える箇所があります（エペソ1:21-24、IIコリント5:1-10）。どうして聖書では、中間状態について諸説があるように見え、明確に教えていないのでしょうか？その理由は「明らかに中間状態が臨時の状態にすぎないからである」とL.ボェットナーは語っています。³⁵もちろん、黄泉で休んでいるにしても、天国に在るにしても、キリストにあって亡くなっ

³³ 岡田稔著『改革派神学概論』（広島県竹原市：聖恵授産所、1985）、329-30。

³⁴ "Heaven, Ascent to" in *The Anchor Bible Dictionary*, ed. David Noel Freedman (New York: Doubleday, 1992). 唯一の例外は、エノクとエリヤであり、創世記5:24の「神は彼を取られた」という意味は、「ギルガメッシュのウトゥナピシュティムやホメロスのメネラウスの場合のように、この地上のある特別な地方へ」移されたという事だろう、とテイバーは述べています。また「エリヤは、このケースに当てはまると思われ、II列王2:11の『天』は、旧約聖書の他の無数の箇所のように単純に『空』を意味したかも知れない」とも言っています。

³⁵ Laraine Boettner『神学事典』（東京：聖書図書刊行会、1972）の中の「中間状態」。

た方々は主のみ手の中で憩いを得ていることでしょう。しかし、人間は、最初から霊肉一体として造られ、³⁶それが大変良かった状態でしたので（創世記1、2章）、靈魂が肉体から離れているのは一時的であり、人間としては不完全な状態なのです。そう言うわけで、パウロが本当に強調し、待ち望んでいたのは、中間状態ではなく、クリスチャンが肉体をもってよみがえることだったので（Iコリント15章）。

2 復活の身体は？

では、よみがえった時の私たちの身体とはどのようなものなのでしょう。パウロは色々な言葉を使って説明しています（Iコリント15:35-49）。具体的には、よみがえられたイエスのみ身体が例としてあげられると思います。復活の主の身体は、手に十字架上でできた傷跡があるように、よみがえる前の延長上にあるものでした。また手で触れれば触ることができ、また魚を食べる現実の身体でした。霊でも、幽霊でもなかったのです。しかし、同時に、朽ちることもなく、また閉じた戸をこえることができた身体でした。つまり、以前の身体と連続している面と、連続していない面の両面を持っていたのです。この連続と非連続という二面性は、私たちのよみがえりの身体にも当てはまるでしょうし、今の天地と新天新地との関係にも当てはまることだと思います。

3 「国籍は天にあり」

福音派の指導的新約学者N.T.ライトによると、当時のピリピ市民の持つ国籍（ローマ市民権）が意味したのは、いつかローマに行ってそこに住むということではなく、自分達が敵に襲われた時、主（ギリシャ語でキュリオス、カエサルが市民に自らを呼ばせた称号）が軍をもって救いに来てくれることでした。³⁷ですから、国籍が天にあるというのは、私たちが天にいつか帰るという意味ではなく、そこから主であるキリストが来て下さり私たちを救って下さるという意味なのです。ですから、次のようにみ言葉が続いています。「私たち

³⁶ 旧約聖書の「息」は、靈魂でなく「命」の現れです。

³⁷ N. T. Wright, *New Heavens* 参照。

の国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます」(ピリピ 3:20)。

パウロは、人間の身体だけではなく全被造世界も贖われる、と信じていたことは重要です(ローマ 8:19以降)。パウロにとって目に見える世界は、滅び、消えてなくなる運命にあるのではなく、「滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられ」るのです(ローマ 8:21)。パウロはまた、キリストによる神の和解は、目に見えるもの全てを含む「万物」に及ぶことを強調しました(コロサイ 1:16, 17, 20)。自由にされた被造世界が滅びることがない、という教えは、「わたしの造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くように」というイザヤの言葉に通じるでしょう(66:22)。

最終的な段階で、被造世界が消え去ることはありません。贖われ、変えられるのです。パウロもまた、人が地上で神と一つとなることを信じていたのです。

4 「天の故郷」

ヘブル人への手紙の著者は、クリスチャンは「天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました」と述べています(11:16)。この都とは、「生ける神の都、天にあるエルサレム」(12:22)です。では、著者はここで、天国へ行くことを待ち望んでいるのでしょうか？

実はヘブル書は「後の世」(2:5)、「後にやがて来る世」(6:5)、「かの日が近づいている」(10:25)、「来るべき方が来られる」(10:37)と、クリスチャンの目を、イエスが来られる「後の日」に向けさせます。ヘブル書で待ち望んでいるのは、現在のエルサレムではありません。かといって、今死んで天に行くことでもないのです。ヘブル書13:14にはっきりと書かれているように「後に来ようとしている都を求めているのです。」黙示録の以下の箇所は、おそらくこの「後に来」る瞬間を描いているのでしよう。

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。(21:2-4)。
ヘブル人への手紙の著者は、後に地上に降りて来るところの聖なる都を待ち望むよう、私たちに励ましているのです。

5 「父の家には、住まいが．．」

ヨハネの語る永遠の命とは、魂だけが天国で永遠を過ごすといった至福ではありません。「わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます」(ヨハネ 6:40、54節も参照)とあるように、肉体を持ってよみがえる命なのです。「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます」(14:3)というイエス様の有名な言葉があります。ここで「私がまた来て」という時、一般的には個人が死ぬ時と思われていますが、実際は、「終わりの日」に主が再びこの地に来られることを指しているのでしょう。その日、主は私たちを肉体をもってよみがえらせて下さいます。その時に私たちが迎え入れられる「父の家」とは、地上に降りてきた聖なる都のことでしょう(黙示録 21, 22章)。

6 「天は．．．消えうせ」

ペテロも被造世界が消えてなくなるとは考えていませんでした。II ペテロ 3:10にあるパレコマイ(過ぎ去る、新改訳では「消え失せる」とユウリスコー(あらわになる)という二つのギリシャ語から、今の世界は消滅すると考える人がいます。しかし、この二つの単語は必ずしも消滅を意味しません。前述のシーセンは、この箇所について次のように語っています。

天も地も、消滅することはない。サイズは、次のように述べている。
 地と天が過ぎ去ることを語っている箇所です。…原語は決して、存在の解消を意味するものではなく、…、一つの場所または状態から他に移ること、…、時間的には、かつて存在していた出来事や状態が、他の出来事や状態に道をゆずって、過去のものとなることを意味する。これが、地と天に用いられた場合、大きな変化を意味することは明白であるが、完全な消滅とか、物質が存在しなくなることを意味するというのは、聖書にも古典ギリシャ語にも、証拠となるべき明らかな例がないのである。この中心思想は移行であって消滅でない (*Op.cit.*, III, 371)³⁸

特に第三章の文脈を考慮すると、この箇所は宇宙の消滅でなく清めと刷新を強調しています。³⁹ ちょうど古い天と地が水によって滅びたように、今の天と地は火によって滅ぼされるとあります。しかし、ちょうど古い天と地が水によって消滅するのでなく、清められ刷新されたように、今の天と地も、火によって消滅するのでなく、清められ刷新される、と考えられます。だからこそペテロは、魂だけが天国へ行くことを待ち望む、と言わずに、「正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます」(II ペテロ 3:13) と語るのです。

7 新天新地に関する二つの立場

新天新地に関して、教会の中には二つの立場があります。一つは、現在の天と地が一旦完全に消滅してから、神が無から全く別の天地を造るという立場。もう一つは、今の天地が刷新されるという立場です。福音派の代表的な注解書である新国際注解書の『黙示録』の著者、ロバート・マウンスは、この二つの立場の違いは「重要なものではない」と書いています。注目したいのは、二つの立場を超えてマウンスが強調する点で、次のように

語っています。

イザヤ書の最後の章で、主は「新しい天と新しい地を創造し」(イザヤ 65:17)、それは「み前にいつまでも続く」(66:22)と約束された。この約束の成就の詳細は、新しいエルサレムが天から下り、新たにされた地上に降りるというヨハネの幻によって、明らかになっていく。…地上の一時的な世界から、霊的で永遠な世界へと魂が逃げだすことが救いである、というギリシャ的二元論と違い、聖書の思想は「地上の存在から離れた天の世界ではなく、人を常にあがなわれた地上に置く」とラッドは強調する(p. 275; グラッソン p. 115 参照)⁴⁰

つまり、上記二つの立場のどちらにしても、「私たちは永遠を、地上で肉体を持って過ごすのであり、現在の主にある生活は、何らかの形で新しい地上にもたらされる」という点では、共通しているのです。

III 終末の今に生きる

カナダにあるリージェント・カレッジの組織神学者スタンレー・グレンツは、三つの千年王国説の違いを認めてそれぞれを評価しつつも、三説が共通する新天新地での救いの完成を見ることを勧めています。⁴¹ 同時にグレンツは、旧約聖書の預言者達が終末を語る時、その目的は、いつも今の生き方に影響を与えるためだった、と述べます。⁴² では、今まで学んできた世の終わりの出来事は、私達の日々の生活にどのような影響を与えるでしょう。

A 新プラトン主義的霊性

西方教会(今のカトリックとプロテスタント)は、神との親しい交わりを正しく強調するけれども、神の被造世界を低くみてしまう新プラトン主義の

³⁸ 『組織神学』、837.

³⁹ この箇所の釈義に関しては以下を参照。David M. Russell, *The "New Heavens and New Earth": Hope for the Creation in Jewish Apocalyptic and the New Testament, Studies in Biblical Apocalyptic Literature, vol. 1* (Philadelphia: Visionary Press, 1996).

⁴⁰ Robert H. Mounce, *The Book of Revelation. The New International Commentary on the New Testament*, ed. F. F. Bruce (Grand Rapids: Eerdmans, 1977), 368.

⁴¹ Stanley J. Grenz, *The Millennial Maze* (Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1992), 第8章。

⁴² Stanley, *Millennial*, 202.

影響を強く受けてきました。そのため、神と一つとなるためには物質世界から離れて天上に行くしかない」と誤解し、この誤解は次第に一般的となりました。特にプロテスタント教会は、感情や身体よりも、理性と魂を上に見る現代主義の影響を強く受けたため、このプラトン主義的靈性がより強くなってしまいました。神と一つとなることと伝道に対する熱心さは、聖書的で正しいのですが、このプラトン主義の影響を受けて、その内実に歪みが生じてしまったのです。

「あの世的終末論」とプラトン主義の靈性では、全世界は結局消えてなくなるので、地上でなすあらゆることは、永遠の意味は持ち得ません。救われた靈魂だけが天国に行き、そこで永遠を過ごすので、地上でなす唯一の価値ある仕事は伝道となります。すると「証しになるかどうか」だけが問われてきます。「世俗」の仕事で時間を取ることは、証しにならない限り意味のないこととなります。そして、その他は伝道のための手段となります。友情さえも手段となってしまうのです。

愛を込めて家族のために料理しても、家を注意深く綺麗に掃除して美しく飾っても、愛をもって子育てしても、貧しく抑圧されている人々を助けても、医療技術を発達させて不治の病と闘っても、環境保護のための市民運動に参加しても、職場で誠実に質の高い仕事をして、良い「もの作り」をして、謙遜に研究をして、質の高い芸術を音楽を求めても、結局世界は消えてなくなるので、それ自体では意味がないのです。そのためクリスチャンは、真剣に、心から、確信と喜びをもって日常の営みができなくなってしまいます。腹の座った生き方、社会に影響を与えられるような貢献ができず、逃げ腰になります。そして、伝道と教会生活だけはしっかりやるけれども、政治やビジネス等の残りの全ての生活は、どうしても周りに流されていくという結果になりやすいのです。⁴³

⁴³ ギリシャ思想の復活とも言える啓蒙主義が私達の靈性をゆがめ、結果的に私達の生活がかえって世俗化している、との指摘は今世界中で起こっています。例えば、以前 KGK が日本に招いた、オックスフォード（イギリス）の福音派の学者 Alister E. McGrath, *A Passion for*

後藤俊夫師も、天国ではなくて新天新地において救いが成就されるという立場を取っています。そして、

もし、今の世と、来るべき世が完全に断絶しているのであれば、この歴史におけるあらゆる文化的営みは、究極の意味はなくなります。極端な言い方をすれば、あらゆることは伝道的手段としての意味しか持たないということになるかも知れません。⁴⁴

と語ります。前述のライト⁴⁵も「死んだら天へ行きそこで永遠を過ごす」という考え方は、グノーシス主義やストア派（p. 9）のものであり、また仏教にも近い（p. 23）と言い、このギリシャ的な考え方は、幾つかの賛美歌や文学を通して私達の間を広がり、私達の聖書解釈に影響を与えているだけでなく、私達の生活にも大きな影響を与えていると述べ、次のように語っています。

この世界から逃げて無時間無空間の天に行くという考え方は創造世界に対して非聖書的な態度をもたらすもので、環境を守る活動や孤児の世話、また飢えたものに食べさせるという働きに携わるものはどこか信仰に背を向けているかのように思われてしまう。もっと「靈的」な事をすべきである、と。（p.18）

ライトはこの靈性を「グノーシスの靈性」と呼んでいます（p. 18）。

アムステルダム自由大学等で教えるポール・マーシャルは、『わが故郷、天にあらざ』（いのちのことば社）の第一章で次のように嘆いています。

アメリカ合衆国では、... 人口の半数以上が教会に通っていて、その教会の多くは福音派だ。しかし、社会の中でキリスト教的な価値

Truth (Leicester: Apollos, 1996), 特に p.174-75, ゴードン・コンウェル神学校（アメリカ、ボストン）で教える David F. Wells, *No Place for Truth* (Grand Rapids: Eerdmans, 1993), リージェント・カレッジ（カナダ、ヴァンクーバー）の Craig M. Gay, *The Way of the Modern World* (Grand Rapids and Carlisle, UK: Eerdmans and Paternoster Press, 1998)等です。

⁴⁴ 『終末を生きる神の民』、「ライフ・ブックレット」、no. 7, いのちのことば社、1990年、35。この書は、この小冊子にあるような視点で分かりやすく聖書全体を見直しています。

⁴⁵ 以下 N.T. Wright, *New Heavens* より。

観や信仰に触れる事はほとんどない。．．．一つの理由は、一流の大学で実際教えている教師、テレビ局や映画会社で働いている人、主要な新聞社の記者、その他のマスメディアに関わる人たちの中で、献身的な信仰者の数は、わずか三パーセント前後でしかないからだ。

この不釣り合いな状況の原因は、上記の「あの世的終末論」にあるとマーシャルは語ります。

私たちは、死んだ後に身体は永遠になくなり、肉体は身体のない霊となる、という異端の考えを受け入れてしまった。．．．死後は天国に行くのだから、地球の事はどうなってもいいという考えも、非聖書的だ。

この間違った考えのため

クリスチャンは、天使の見習いにすぎず、地上という待合室に今のところ押し込められてはいるが、本当は天上の、体のない世界に相応（ふさわ）しい者で、そこに行くのをひたすら待っているだけ、ということになってしまう。

とマーシャルは語ります。つまり、「あの世的終末論」は、新プラトン主義的靈性を形作り、その靈性は、クリスチャンが世の光、地の塩となることをさまたげてしまう、神が望まれているような積極的で創造的な生き方、本来の人間の生き方の回復を阻害してしまう、と言うのです。

B 聖書の靈性を目指して

このような「あの世的」終末論と新プラトン主義的靈性に対し、N.T.ライトは次のように反論しています。

聖書は、神の世界が良いものであることと、その世界を新たにしようとする神の御計画を強調している。だから、聖書は、神の被造世界を正義に向けて変革していこうとする、あらゆる動機を私たちに与えてくれるのだ。⁴⁶ 私たちは、この聖書的で包括的な終末論を回復する必要があります。

しかし、ここで注意しなければならないことがあります。実は聖書の終末論を回復するだけでは不十分で、聖書の靈性を目指す必要があるのです。

何故でしょうか。それは、神の御計画全体を正しく理解したからといって、そのような歩みは私たちにはできないからです。

神を第一とし、愛と正義に生き、環境を守りながら生きることは困難です。いや実は、アダムとノアの子孫である私達には不可能なのです。実際、挫折や失敗することの方が多いでしょう。拒絶や嘲笑にあうでしょう。不義不正が結局まかり通るのを見て落胆するでしょう。私達自身、どぶにつき、日々罪に負け、手を汚しながら生きています。身体だけでなく、生育歴等の理由で心に様々な傷を負っています。そのような傷はなかなか癒されず、病み、老い、ついに死んでいきます。また教会は今まで激しい迫害を通過してきましたし、現在も世界各地でクリスチャンに対する迫害があり、今後もそれは避けられないでしょう。教会内部には、常に墮落と腐敗がありました。今、私達は破壊されつつある被造世界と共に、罪と死の中でうめいているのです（ロマ 8:18-30）。

世界と自分自身のこの痛みの現実を目を閉ざしたまま、単純で楽観主義的な生き方はできません。確かに正しい神学や思想、そして世界観は、今まで述べてきたように必須です。しかし、私たちを根底から変えるのは神学、思想、世界観ではありません。キリスト教世界観と包括的終末論を理性で理解しただけでは、私たちは生きることはできないのです。それはちょうど、正しい道に立っても、歩く力がなければ、正しい目的地に向かえないのと同じです。正しい理解に立った上で、私たちの魂に触れて下さる主イエスとの深い交わりが必要なのです。主御自身のみが、罪の内にうめいている私たちを赦して下さり、無条件の愛を日々注いで下さっています。私たちはそこに憩うことができます。しかしそれだけではありません。主はその全き愛の内に私たちを癒し、本来の人間らしい生き方に向って私たちを回復させて下さっているのです。カナダ、リージェント・カレッジの宣教学部長チャールズ・リングマは、そのような靈性を目指す一人で、彼は「総合的、包括的靈性」という言葉を使い、生活全領域の変革が、神との

⁴⁶ N. T. Wright, *New Heavens*, 22.

深い交わり、愛の交わりのうちになされる、と位置づけています。

C キリストによる回復

神である方が、二千年前に人となられ、地上で神の民と共にいてくださいました。イエスは、回復され完成された第二のアダムです。主は十字架にかかり、よみがえって、罪と死と悪魔に勝利されました。イエスが死からよみがえられた時、正式に終末が始ったのです。新しい創造であるイエスは、来るべき時代に属しながら、現在に「侵入」してくださったのです。

イエスは新しい被造世界の初穂で、私たちもまた、新しい創造です。主は、御自身を信じる者を赦し、義と認めて下さっただけでなく、信じる者の内にご自身の霊を遣わして下さいました。神はこの地上でご聖霊によって私たちと共にいて下さいます。これは、地上で神と一つとなることです。このご聖霊によって主は、私たちの生活の内に勝利を現そうして下さいています。⁴⁷ご聖霊により、私たちは来るべき時代の前味を味わうことができます。将来世界中で完成される神の国（支配）が、今、その姿を現し始めたのです。終末は確かに始りました。

そのことは、私達は実感出来ないかも知れません。それどころか、自分達の過去の歩みと、教会の二千年の歴史を振り返ると、私たちは神の御名を汚すことばかりしてきたと思えるかもしれません。パウロのように、惨めな罪人の頭としか、自分と教会の事を感じられないでしょう（ローマ7、8章）。

しかし、そんな私達の内には、私たちの間で、私たちを通して、主は確かに御霊によって二千年間働いて来られたと私は信じています。主の御霊に

⁴⁷ グスターフ・アウレンによると、聖書は、私達の生活を罪と死から解放する勝利者としてのキリストによるダイナミックな贖罪観を提示していて、初代教父のエイレナイウスやルターをそれを正しく理解していた。しかし、カトリックでは、ギリシャ思想とローマ法の影響を受けて贖罪の理解が歪み、消極的、法的、非人格的なものになってしまった。そしてそのゆがみが、正統主義の時代にプロテスタントの内に復活し今に至っていると指摘します。前掲、『勝利者キリスト』参照。

よってのみ、私達は、社会に愛と正義をもたらすために、家庭で職場でまた市民運動や第三世界への援助などを通して努力できるのです。主に頼り頼み、御霊によって自分と他者の心身の癒しを求めます。本当の意味で自分らしい、また人間らしい文化（料理、芸術、音楽、建築、科学、政治・経済機構を含む）を主によって形成しようとしません。そのような歩みは、簡単でないにしても生き生きとして喜びを与えてくれるものでしょう。また私たちは主により頼んで、神が造られた自然界を犠牲を払っても守ろうとします。料理であろうと、研究であろうと、陶芸であろうと、職場での歩みであろうと、庭の掃除であろうと、私達は創造本来のあり方を目指し、主にあって歩もうとします。たとえ寝たきりであってもイエスとの交わりの内に憩い、生きようとしています。実はそれらは全て、たとえ私達が意識していなかったとしても、未完成のものであっても、キリストのみ業です。創造秩序の回復（神の国の樹立）のために地上に来て下さったキリスト・イエスご自身が、ご聖霊により、ご自身の民を通してなさっている力強いみ業なのです。そして、教会の歴史を注意深く学ぶ時、確かにそのような有名無名の聖徒を主は起こし、家庭を社会を歴史を変えてきて下さって来たことが分かります。ですから、今私達がイエスに頼りつつ、また、うめきつつなしている労苦、創造秩序の回復のために日々生活の現場でなされる労苦は無駄ではなく、今の世界に貢献しているのです。

D キリストによる完成

しかも主イエスは、現在私達を通してなさっているご自身のみ業を、終わりの日に全地で完成されます。「私達の文化的営みは、... 何らかの意味で新天新地にもたらされ」ます。⁴⁸「この世界とそこに生きる私たちの人生は、ただの通過点ではない。永遠に続く世界を建物にたとえれば、私たちはその建築用ブロックを作っている」のです。⁴⁹そして新しい地で、私達の今の「うめき」が勝利

⁴⁸ 後藤俊夫、前掲書、35。

⁴⁹ マーシャル『わが故郷』、第17章。

の歌声に変わります。パウロは、終末を語る箇所の中で次のように述べました。

ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされることなく、主の業に励みなさい。あなた方は自分たちの労苦が、主にあって無駄でない事を知っているのですから。(1 コリ 15:58)

E 最後に

メシアとして来て、人として苦しみ、よみがえって罪と死と悪魔に打ち勝ったキリスト・イエス。この方が、今日という終末の今、私達の友、神、王として共に歩んで下さいます。この方を見上げ、頼り、交わり、生活の全ての分野で従って生きていきましょう。またこのキリストを全世界に宣べ伝え、この福音理解に生きる弟子を全世界で生み出していきたいと思えます。

創造の回復シリーズ

神の造られた世界は秩序あるよいものでしたが、墮落の故に歪んでしまいました。しかし、神はキリストによって全被造世界を創造本来のあり方に回復し、また完成させようとしてされています。この小冊子シリーズは、創造秩序の回復と完成というキリスト教独自の視点で書かれています。

No.1 終末の今を生きる：千年王国説の違いを超えて

私達の救いは、仏教やギリシャ思想のように魂が天に行くことで終わるものではありません。実は、キリストがもう一度地上に来て、私達を新しい地上によみがえらせ、全世界を変えて永遠に治めて下さることこそが救いの完成なのです。このキリスト教終末論は、聖書、古代教会の理解、また福音派の学者によって支持されているだけでなく、生活の現場での私達の日々の労苦が無駄でない、と語ります。(B5版、15ページ)

No.2 神国論に見る新プラトン主義的霊性

救いが天上で完成するというのは、二元論的なギリシャの異教思想です。この異教思想は5世紀前後に西方教会(ローマ教会)に入って来たようで、アウグスティヌスの神国論にもその軌跡が見いだされ、それは、宗教改革者にも影響を与えています。(B5版、6ページ)

No.3 内村鑑三の終末観：世界観的回心の体験

西方教会に入って行ったギリシャの異教思想は、プロテスタントに引き継がれ、内村鑑三も二元論的な救済観を持っていました。しかし、内村は、1918年にそれまでの救済観から脱却し、古代教会が持っていたような聖書的な救済観・終末観に開眼し、生き方が変化して行きます。(B5版、3ページ)

No.4 デートの原則、結婚、性

婚前交渉と墮胎をする若者の年齢は益々低年齢化しています。その背後には、自分と異性また、性と結婚に対する間違った考え方があります。この小冊子は聖書が語る人間観、性、結婚観を出発点として、デートの原則を探ります。高校生以上の方々、中高生科のスタッフ、またご両親方にお勧めします。(B5版、13ページ)

著者紹介

島先克臣(しまさき かつおみ) 1954年埼玉県久喜市生まれ。二十歳の時入信。立教大学英米文学科、聖書宣教会、米国ゴードン・コンウェル神学校旧約修士、英国チェルトナム・グロースター大学旧約博士過程(ヘブル言語学)終了。牧師(日本1981-87)、宣教師(フィリピン1988-93, 2000-04)。3児の父。

終末の今を生きる：千年王国説の違いを超えて

2000年3月1日 初版発行、 2004年10月1日第四版(改訂版)発行

著者 島先克臣

発行者 島先克臣

〒346-0002 埼玉県久喜市野久喜 835-6